

連載の意図と問題意識

本連載のタイトル「宗教批判の克服学」の意味について尋ねられることがある。

それは、ただ単純に宗教に対する外部からの批判を、いかに克服するかということの意味するものではない。これだけだと、単なる宗教の「自己主張」の学になってしまう。むしろ、宗教の側にも批判されるべき部分は数多くある。まず、この事実を宗教の側がしっかりと受け止め、きちんと自己批判することが必要である。その上で、宗教自らが、そのような批判されるべき側面をいかに克服するかを目指していく。そうしてこそ、はじめて宗教の「批判の克服」学となるのである。この問題意識に基づいて、私は本稿の連載を続けてきた。

7月6日に、私は生殖補助医療をテーマとする教団附置研究所懇話会の第11回生命倫理研究会に参加して発表を行った(本号14頁参照)。このテーマほど、私のそうした問題意識を強く感じたテーマもないように思われた。

家族の規範イメージの拘束性

当日、コメンテーターとなった龍谷大学の猪瀬優理氏は、カトリックを例に挙げながらも、宗教界全体では概して、「人工中絶」より「人工生殖」について禁止のトーンが甘く、生殖を積極的に奨励するところが宗教にはあると指摘された。

その背景には、宗教には望ましい家族の規範イメージがあり、この規範を満たすために生殖が不可欠となる。生殖はこのとき、「そうあるべき基準」に沿いたいという「欲望」として位置づけられる。ただ、この規範は、子どもが授けられない場合には逆に抑圧的に作用し、不妊の人(とくに女性)を責めるような説き方となる。そうした事態に対して宗教者はどう考えるのかと、猪瀬氏は問題を投げかけた。

確かに我が国の宗教の歴史を振り返ってみても、伝統宗教にせよ新宗教にせよ、女性に対しては妊娠圧力の一端を担い、この圧力を先導するような言説の担い手となってきたのは事実である。その理由として、とりわけ我が国の多くの宗教が“家の宗教”化しており、その教えも家制度を助長しがちだというのは、つとに識者によって指摘されてきた事柄でもあった。

一方で、宗教が理想とする家族の規範イメージに合致しない状態にある人々にとっては、宗教の教えは自分が「そうあるべき基準」からの逸脱をたえず指弾する責め道具のようになる。また、そうした規範イメージばかりの強調は、このイメージに合致している人々にさえ、精神的な拘束感や苦痛をもたらしかねない危うさがつきまとう。

近年の宗教離れの一因も、“家の宗教”としての宗教的諸言説への忌避意識からくるところが大きいのではないだろうか。

我が国の家族構成は、大きく変化してきている。2010年秋の国勢調査の抽出速報では、一人暮らしが31%と首位になり、典型的とされた夫婦と子ども世帯が29%、夫婦のみが20%となっており、家族の人数も平均2.46人と最少を記録した。

独居高齢者や未婚のシングルが増大する中、“家の宗教”の言説が、不妊の人に対してばかりではなく、そうした人々の心に次第に届かなくなりつつあるのではないか。この現実、宗

教界が真摯に受け止めなければいけないと思う。

“いのちの尊厳”から“いのちの縁”へ

代理出産の問題に代表されるように、第三者を介した生殖補助医療については、宗教は、そうした医療が“いのちの尊厳”の観点から、人間が人間としてあるために、神仏によって人間に定められた、超えてはいけない一線を超えてしまうことになるという反対論がある。この種の医療は人間生命の“母体”の不正な使用(道具化・手段化)になる。それゆえ、生殖は夫婦の努力の範囲に限定すべきというわけである。

しかし、どちらかといえば微視的な“いのちの尊厳”の次元での議論では、まだ生殖そのもの、あるいはより大きく家族のあり方をめぐる宗教の視座については、不十分にしか語っていない。これについてより包括的に語るためには、より巨視的な“いのちの縁”ともいうべき側面から説き起こしていく必要がある。

生殖補助医療において強調されるのは、血や遺伝子でつながる生物学的な生命のつながり(いわゆる血縁)である。これも“いのちの縁”には違いないが、宗教にとっては、血縁は数多く存在する“縁”の小さな一部分にすぎない。

宗教の立場からすれば、遺伝子や血のつながりを絶対化すること自体、一種の「偶像崇拜」となる。この囚われから人々の心魂を解放し、その決断に神仏の教えから力を添えることこそ、宗教の社会啓発的かつ臨床的な役割があるように思う。そしてそのためには、この問題に携わる宗教者自身が、何よりも生殖に対する囚われから解放されていなくてはならないだろう。“家”の存続を絶対化することも、やはり「偶像崇拜」に他ならないからである。

宗教的人間論の共通認識

たとえ遺伝子や血のつながりがなくても、“いのちの縁”は親子・兄弟姉妹の縁として結び、育んでいくことができる。それは心理的・社会的な意味での“いのちの縁”を養うことになる。

この視座は、一家庭内だけでなく広く社会へと拡大させることが可能である。我々が想像力を働かせるなら、老人を見れば、自分の親や祖父母と見、子どもを見れば、自分の子や孫と見ることができ、誰もが自分の兄弟姉妹と見なすことができるだろう。

いや、より深い視点で言えば、我々人間は実のところ、神仏からみれば皆“子ども”のような存在であり、その意味で誰もが普遍的な“兄弟姉妹”である。宗教には超越的根拠からこの真実を語るができるはずである。

どの宗教にも固有の人間論があるが、たとえ教義上の述語が相違しようとも、宗教はいずれも人間を人間として位置づけており、我々人間は人間である限り皆“兄弟姉妹”であるという共通認識があると思う。それは、神仏が媒介して結ばれる魂の次元での“いのちの縁”に由来する共通認識である。そこでは、人々は誰一人として“他人”ではありえず、全人類が“いのちの縁”で結ばれていると言うべきであろう。

宗教がこの基層的な魂の“いのちの縁”の視座に立つことを忘れなければ、どんなに家族構成が変化して行こうとも、生殖や家族の問題について苦しみ悩む人々の心に届く発言ができるし、そうした人々に寄り添うケアもできると思うのである。